

756

玉
葛

256

237

西書

見多諸國一見乃僧也

行の南都あるはく

あく海ありて父はより初瀬

まづぐと志てゆ

お原宮はあ

行東殿は寺

44 21
内容

三輪の松山本山まば程もあぐりも
何れも遠はまきりく^{早白}あぐりも
我々のまきりく^{シテ女上}あぐりも
まきりく^{シテ女上}程もあぐりも
初瀬川のほろねたるまきり
舟も^{サレ}舟も^{サレ}舟も^{サレ}
あぐりも^{サレ}あぐりも^{サレ}あぐりも^{サレ}

あぐりも^{サレ}あぐりも^{サレ}あぐりも^{サレ}
心乃月のまきりく^{サレ}
あぐりも^{サレ}あぐりも^{サレ}あぐりも^{サレ}
袖は色まの^{サレ}暮^{サレ}秋の^{サレ}
村時^{サレ}古^{サレ}野^{サレ}の^{サレ}
人^{サレ}も^{サレ}舟^{サレ}も^{サレ}舟^{サレ}の^{サレ}
たえづ^{サレ}あぐりも^{サレ}あぐりも^{サレ}

うらうらも雲よ日影も白ふあけの
 けりあけの雲もかくけりあけの詠め
 遠空類もあも面白の音もあて里
 つま奥あけの谷あけのあけの
 絶どの霧もあけの夕あけの
 かくては雲もあけのあけの
 きんもあけのあけのあけのあけの

下あけのあけのあけのあけの
 次はあけのあけのあけのあけの
 すきあけのあけのあけのあけの
 フタモト
 二本乃あけのあけのあけのあけの
 校のあけのあけのあけのあけの
 あけのあけのあけのあけのあけの
 あけのあけのあけのあけのあけの

お尋ねの口持はさつきに後で好むを

右ウデの口持はさつきに後で好むを

中ナカの口持はさつきに後で好むを

給タマフの口持はさつきに後で好むを

あアの口持はさつきに後で好むを

思オモの口持はさつきに後で好むを

あアの口持はさつきに後で好むを

おつららるるの月お井たうら
り居たうきの
も絶く多まを
人ヒトのあらいは
松浦マツウラの唐土カラキに
かゝる我ワレの
あアの口持はさつきに後で好むを

行旅や作へくしまつし白波はひらき
能まき思ひある方もあかくて
都の中とても我はゆるる身なり
まほらうらめさ水鳥の陸はまこ
ちちしてあつしまひきらぬ身は程と
思ひ致さくはまきあや足東の大和
路も唐土にも同分あるまの寺は

傍でつゝ美年もあるぬらつちぎり
初瀬山尾上乃錦のよらうまの思ひ絶
みし古の人は二度かき本す校の立
どききつひのふのふと詠まきまの
逢ぬとたのめあや思ひは法乃夜忠
まあら玉書まのひを照し給や
定ふらむの申も悟まけら後もいさり

江よまほむねなるるるのあまされ共
思百のうめ物敷の早くも初や清
かたぬ 纏又ひらぬ かの後と
頼母とて法の人があひあつれ
こそこの後の病乃玉のなと名乗も
やらぬ城はまきりく 扱きお昔の
内依うりよ 顯まひるまきるすやたるとい

業因たぞくた 照らばらぬや日暮
さるりく 大煮大集のちちあひあは乃
燈あまららたあまのあまはあま
あま 纏てんあまらあま
あまあまのあまあまのあま
あまあまのあまあまのあま
あまあまのあまあまのあま
あまあまのあまあまのあま

256

237

複製不訂



訂正者

観世清



發行者
印刷者

檜

常之

(特電話二番)
振替野金大阪三



明治廿二年六月廿五日從
 同 廿四年一月廿八日迄 出版御届濟
 同 四十三年四月廿五日從
 同 四十四年十一月廿五日迄 再版
 同 四十四年三月十五日別製本御届

玉とみるまをのめを
 影もよもや懐くやと此を執とひ
 久の心なきを玉うづら心真如の
 玉うづらめがとて夢路のえよを

